

# インドネシア防災強化事業

## —地域の力で災害に備える、立ち向かう—

### 社会課題



©インドネシア赤十字社

インドネシアはアジアで最も自然災害が多い国の一つです。過去20年間の自然災害における死者数は日本の約7倍。2018年だけで約4,000人が死亡し、約300万人が避難を余儀なくされました。\*インドネシア国家防災庁調べ(2018)に基づく

堤防などの防災インフラがほとんど整備されていないなか、中央政府が整備する防災方針等が地方行政に浸透せず、地域一人ひとりの防災意識や備えも十分でないことが課題であり、災害に備えて地域主体で対策を進めておくことが、今、求められています。

### 赤十字の解決策

災害リスクの高いインドネシア・ジャワ島南部で、学校と村落をベースにいのちを守るための防災知識とスキルを村民や子どもたちに普及し、地域の防災体制を強化します。

#### 学校防災



©インドネシア赤十字社

12の学校で教員に研修を実施、生徒約1,200人が防災知識を学び、家族など身近な人に知識を広めます

#### 村落防災



©インドネシア赤十字社

8村(約2万人)で、リスクマッピング、防災計画策定、災害時資機材の整備、避難ルートの確保、各種防災訓練など、対策を講じます

#### 持続性



©インドネシア赤十字社

防災活動が地域に根付いていくよう、各村でボランティアを組織育成し、地域会議の開催により行政とも連携しながら、基盤を強化します。

◆日本赤十字社は現地代表部を設置して、実施主体であるインドネシア赤十字社を支援しています。

### 【SDGsとの関係性】



## 事業2年目(2022年度)の様子 災害に見舞われながらも、地域の防災力を磨いています



### ◆村落ボランティア 「SIBAT(シーバット)」

「SIBAT(シーバット)」という、インドネシア赤十字社の村落ボランティア。本事業でも各村々でSIBATグループを結成しました。防災活動や災害対応はもとより、新型コロナウイルス蔓延防止の普及啓発活動や村の伝統行事などでも活躍。今では頼れる村のなんでも屋さんです。男女問わず和気あいあいと活動中！

### ◆学校防災活動の本格化



新型コロナウイルス感染拡大の影響で、長く学校が閉鎖されていましたが、2022年の春頃に制限が解除され、学校防災の活動を本格化しています。

◆**度重なる災害** 2022年、事業地では10月に大規模な洪水やサッカースタジアムの事故があり、12月にはセメル火山の噴火にも見舞われました。インドネシア赤十字社の職員、ボランティアらは災害対応訓練で学んだ知識を実践の場でも活かし、救援活動に携わっています。

## 防災ボランティアの声

以前、私たちの村には災害に備える仕組みはありませんでした。今では、自然災害に限らず、村の中で交通事故や怪我等の際も訓練を受けた防災ボランティアが現場に駆け付ける仕組みがあること、私たちの活動が住民に感謝されていることを誇らしく思います。

(ペナゴバル村のペニーさん)



私たちの村は、洪水で被災しました。しかし、日頃から防災について仲間と話し合い、防災訓練などで準備できていたからこそ、災害時に団結し、即時に対応することができました。

(タンジュングバル村のハムダンさん)